

ふ米は赤き物なれば、それをいふかともいへれど、思ふにすべて西土の米は我國の如きはすくなし、さらばかくわかちはいふまじきにやと思はる。

〔松屋筆記 六十六〕尾花粥 尾花色

與清按に、空穂菊の宴<sup>六十三</sup>に、すぎばこよつに箸坏するて、紅葉を折しきて、まつのかくだものもりて、くさびらなどしてをばな色の強飯などまるるほどに、かりなきてわたる云々、同樓の上下一丁に、をばな色の細長云々、太郎百首駒迎、

關の戸に尾花あしげの見ゆるかな穂坂の駒を引にやあるらんなどあるを思ふに尾花色は白色に少し薄黒を帯たるをいふ也、げに尾花の色純白の物ならず、青黒色の氣あるものなれば、さる色をいへるなるべし、葦毛は白色なるに、尾花葦毛といへば黒色まじれるにて鈍色に似て夫よりもはなやかなる也、

〔康富記〕嘉吉二年八月一日己丑、晝過程參清外史之文亭、依遲參、先有使、例式賞翫薄粥、有一盞之後退出了、外史被語云、今日食薄粥之事、未見出處、若被見及歟、予十節記之中不見此粥之事之由返答了、誠可尋出處文也、

南呂之令節、中華之嘉珍祝著幸甚、殊先傾一鍋、次用一雙之條、御計殊本望候、爲其禮、太刀一腰、杉原十帖、筵十枚進候、期面賀候也、

八月一日 爲返狀間歟、表無充所也、業忠

ついたちのめでたき御返しことさらばかり、一かさねつかはされ候よし、おほせ事に候、めでたふかしく、

日向どのへ

應司殿ヨリ御返